

酔心

MIHARA
SUISHIN
SINCE 1860



近年、若手スタッフを中心として商品開発に力をそそぐ「酔心」創業150年という実績と時代に即応した幅広い商品で名醸「三原酒」の名をつむいでいく



写真右から2人が山根 薫。その左隣に並んでいるのが大観。「酒づくりも、絵をかくのも芸術だ」と大観は酔心の酒造りに共鳴した。

大観もこよなく愛した「三原酒」酔心
日本画の巨匠・横山大観（1868〜1958）は、晩年でも1日1升は飲んでいただけという酒仙だが、彼がもっとも愛した酒が酔心だった。現社長の曾祖父にあたる三代目・山根薫が昭和初期頃に大観との縁があり、酒造りの話で意気投合一生分の酒を大観に贈ったという逸話がある。この約束は、昭和33年、大観が永眠するまで続いた。



道路拡張（平成19年1月完了）につき少し海寄りになった酔心の酒蔵。その風格は衰えない。

酒造りの歴史は灘より古い三原酒

海・山に近い好立地と、水質の良さから酒造りが栄えたとされる三原。その歴史は日本酒の生産地でも有名な灘よりも古く、全盛期には西町から東町だけで酒蔵が10軒あった。その中でも、創業1860年の「酔心」は、明治期より数々の賞を受賞し、以後「名譽酔心」として全国に高級酒として名をはせていった。



代表酒の一つは、東広島市・福富のブナ原生林を水源とする軟水で醸した『樺（ブナ）のしずく』（写真中央）。純米大吟醸『鳳凰酔心』（写真右）は酔心オリジナルの1,000ml瓶で半世紀に及ぶ歴史のあるお酒。純米吟醸原酒『酔心紅の舞』（写真左）は広島県独自の酒米「千本錦」を100%使って醸し、広島県のみ限定発売されている。



正面入ってすぐに商品や昔の写真が並ぶサロンが。ここで気になる商品の試飲や説明を聞くことができる。



念願の酔心酒蔵見学に編集スタッフ総出で参加。蔵のすぐ後ろが海だったなど、三原の昔話に「へえ」。

より身近な酒蔵を 目指して

道路拡張工事の酒蔵移築を機に、お客様と話せる空間をつくった。そこには昔の酒蔵風景や大正半ば頃かと思われる東町の風景の写真、懐かしの美人画ポスターなど、ちょっと覗いてみたくなる。酔心のスタッフが蔵を案内してくれるのも意外に知られていない。事前に予約をすれば、昔のまじのことや、酒造りのこと、著名人とのエピソードなどを聞くことが出来る。日本酒は難しそう...という人もオススメだ。

蔵の中はお宝がたくさん！地元では普段見ることができない商品も。写真は肩貼りラベルが美しい上撰酒1.8L。



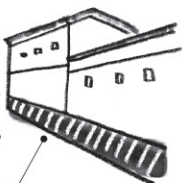
本店では沼田東で造られる酒をピン詰め・出荷まで行っている。一人ひとりの職人技に時間も忘れる。

酔心山根本店

三原東町、2月に行われる神明市では巨大ダルマが鎮座する場所にある。暖簾がかかっているのが気軽に入ってみよう。
■三原市東町1丁目5-58
TEL0848・62・3251
営：8時30～17時30分
休：土・日曜日ほか

我里屋小路

三原城下の面影残る通り。酒蔵ならではの白壁やなまこ壁、ほんのりお酒の香り漂う風情ある小路だ。



裏手にはお客様を招いた時に使用した茶室などがある。整備された庭園にスタッフもウツトリ。

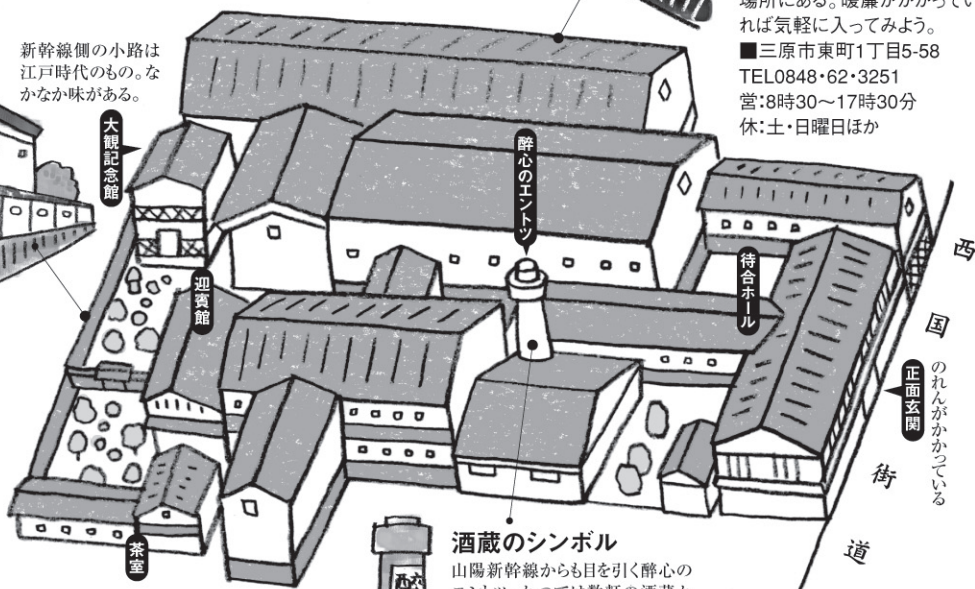


大観記念館

お酒のお礼に...と、大観は酔心に毎年一枚ずつ作品を寄贈した。その作品を収蔵しているのが「大観記念館」だ。大観の作品の他に川合玉堂・夢田春草・頼山陽の作品も（公開は不定期）。



新幹線側の小路は江戸時代のもの。なかなか味がする。



酒蔵のシンボル

山陽新幹線からも目を引く酔心のエントツ。かつては数軒の酒蔵から煙が立ち、三原の風物詩だった。